『宇都宮大学　HANDS 10年史 ー外国人児童生徒教育支援の実践ー』を読んで

脚本家・ライター　松島 恵利子

宇都宮大学の外国人児童生徒教育支援、HANDS事業が10年という大きな節目を迎えました。こうした事業は、思いはあっても、それを継続していくことや、たくさんの人たちを巻き込んでいくことは本当に困難です。しかし、この実践の記録を拝見し、それぞれの支援者の熱い思いが伝わってきて、あらためて、一人一人の力は小さくても、「変えられないからやらない」ではなく、「どんなことでもやってみる」ことの大事さに気づかされました。

HANDSの名前の由来について、「はじめに」の部分でこんな風に書かれています。「様々な関係者が手と手を取り合いながら協力して事業を進めていくという気持を込めて作った」。読み進めれば読み進めるほどに、「本当にその通りだ」と頷いてしまう内容がぎっしり詰まっています。

親の都合で日本にやってきた子や、日本で生まれ育ちながらも外国にルーツを持つことで生きづらさを経験した子ども達が、HANDSの活動の中で、勇気や元気を貰うだけでなく、自らがもともと持っている力に気づいたり、その力を育んで大きく育った事例が数多く紹介されています。それらを読むと、胸が熱くなると同時に、子どもの可能性や未来を奪う権利は誰にもないということを強く感じました。

さらに、過去に支援を受けてきた子ども達が、年齢を重ね、自らが支援者となり力強く成長した姿は、何より頼もしく、人間は環境によってこんなにも変わるのだと、良くも悪くも環境によって人生が大きく左右されるのだということを、ありありと感じました。

特に、印象深かったのは、王希璇（わん　しーしぇん）さんの「自己責任という言葉に惑わされずに、時には誰かのせいにしよう！」（P125）です。中学生になってからの来日、さらに、人見知りが強い性格だった王さんは、日本語の学習以上に人間関係に苦慮したと書かれています。しかし、そんな中でも、国際教室の先生が、語学だけでなく生活面のサポートをしてくれたこと。また、同じように来日した子どもとの気の置けない語らいが楽しかったとも記されています。本来なら、どんな子どもも、こうした支援を受けられるべきなのに、日本ではまだまだ、ぽつんと一人、なんの支援態勢も整っていない学校に入れられてしまうケースが少なくありません。そのことを考えると、改めて、受け入態勢を整備していく必要性を感じます。そして、王さんは宇都宮大学に入学。四年生の時に教育実習を母校で体験するのですが、自分と同じような背景を持つ子ども達と廊下ですれ違ったとき、中国語で「先生こんにちは」と挨拶してくれたというエピソードを紹介しています。子どもにとって先生は特別な存在です。その先生に、母語で挨拶できたことは、子ども達にとって大きな自信と、誇りを与えてくれたと思います。また、「将来、王先生のようになりたい」と思ったかもしれません。

少し話はずれますが、以前、ルワンダに住む友人（障害者の為に26年にわたり義足を作り、無償提供している、義肢装具士のルダシングワ真美さん）からこんな話を聞いたことがあります。

「以前、日本の支援者の依頼で、ルワンダの子ども達に「あなたの夢はなに？」と聞いたことがある。しかし、どの子どもも答えられなかった。日本なら、サッカー選手、学校の先生、トリマーなどすぐに答えが返ってくる。けれどそれは、自分のまわりにそういうロールモデルがあるから。子どもの世界はとても小さい。当時のルワンダには、ジェノサイドで手足を失った障害者たちがあふれていたし、運良く親が居たとしても、朝から晩までドロドロになって働いて眠るだけの、貧しい生活。テレビもなく、そうした環境で育った子ども達は、「こんな大人になりたい」という夢なんて持てないんだと、改めて分かった」

来日する子ども達も、保護者だけでなく、少しでも多くの大人や、憧れとなるような人とふれ合うきっかけが重要です。だからこそ、高校、大学と進学し、さらに、教員を目指して頑張っている王さんの姿は、子ども達にとってすばらしいロールモデルとなったと感じました。

また、話がそれてしまうのですが…私は、年に数回、農業専門誌の記事を書いており、先日は、愛知県にある若い人たちがたくさん働いている農業法人さんを訪問しました。40代のご夫婦が経営されており、さまざまな賞を受賞している優良な農業法人さんです。その方のお話を伺ったとき、ふと、外国につながりを持つ子どもたちの支援と似ていると感じました。

「いま、うちで働いている子たちは、志をもって農業の世界に入ってきた子はほとんど居ません。社会の中で打ちのめされたり、自信をなくしたりして、農業に逃げ込んできた、いわゆる落ちこぼれ集団でした。農家の生まれでもなく、過去に農業経験があるわけでもなく、毎日が本当に大変なんです。というのは、農業というのは（米作）日々やることが違うからです。毎日が初めての事づくしで、覚えることだけでも精一杯なのに、翌日にはまた違う作業がある。死ぬ気で一年働いて、一年がめぐって次の年になったときには、去年やった事なんて全部忘れちゃってるんです。だから、何年も何年も長い時間をかけないと一人前にはなれません。だからこそ、経営者である私達と交換日記のような作業日誌をつけたり、本音をたくさん話せるような場を作ったり彼らの家族も大切にするイベントをやったり。そういうことを必死でやってきて、今日があります。私達夫婦も、過去には落ちこぼれだったのです。だからこそ、彼らに「人生のトロフィー」を上げたいと思って頑張ってきました。もし、うちの農家を離れたとしても、「あの時は本当によく頑張った」「あんな苦しいことを乗り越えた自分がいる」という、自信やプライドが「人生のトロフィー」です。私達には子どもが居ないので、子どもを育てる経験も感覚もわかりません。でも、彼らの親のような気持で育てていきたい。いつもそう思っています。」

外国にルーツを持つ子ども達も、自ら望んで日本に来たわけではありません。そして、右も左もわからぬまま通い始めた学校では、日々覚えなければならないことが山ほどあります。勉強だけではなく、生活習慣、係、委員、ルール、さまざまな行事。覚えていく先から忘れていくことのほうが多いでしょう。農業のように、何年も何年も体験して、やっとなんとかこなせるようになるのかもしれません。その間には、嫌気がさしたり、逃げ出したくなったり、自己嫌悪に陥ることも多いはずです。けれど、それを親身になってサポートする大人がいれば、彼らの気持や困りごとに寄り添ってくれる人が居れば、すべてではないけれど、自信をもって前を向ける子どもが増えると思うのです。

田巻先生をはじめとする、HANDSプロジェクトの皆さんは、もしかしたら、子ども達にさまざまな形の「人生のトロフィー」をプレゼントしてきたのではないでしょうか。

これから益々、外国人児童生徒は増えていき、また、彼らと学校との関わり方も形を変えていくと思います。その未来が明るいことを心から願い、私もその一助となりたいと、「HANDS10年史」を読んで、強く感じました。

（初出:『むすびめ　2000』113号（むすびめの会2021.1）

「多言語進学ガイダンス動画」のお知らせ

田巻　松雄・鄭　安君

2020年9月上旬より、HANDS事業のウェブサイト「だいじょうぶnet.」には、多言語進学ガイダンス動画がアップされています。コロナ禍で日本全国の多言語による高校進学ガイダンスが次々と中止されているなか、ウェブサイトに載せる多言語の進学情報の提供は、更なる工夫が必要となっています。動画は、こうした必要性から生まれた新たな情報形態の一つです。